

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

吉田 駿太郎

【所属】(助成決定時)

東京藝術大学大学院

【研究題目】

タイトル 現代ダンス史における偶然性

副題 アメリカのポスト・モダンダンスと日本の舞踏の振付方法とその関係性

【研究の目的】(400字程度)

本研究では、1960代における偶然性を探求するアメリカのポスト・モダンダンスの振付家の振付方法を対象とし、作品が上演される以前に記述されるダンススコアやドローイングが偶然性を引き起こす要因をもつことに着目し、その構造を解明することである。ここでの偶然性とは、振付方法における必然的な法則が振付家の意図しない他の法則によって影響を受けることを意味する。偶然性を探求する一部の振付家たちは、文面だけで構成される特異なダンススコアを用いたため、それらを調査し、振付方法の変遷をみる必要がある。したがって、本研究の目的は偶然性に関する振付方法をポスト・モダンダンスや同時代の舞踏の振付家たちの関心対象にあった「遊戯性」、「即興」、「創作プロセス」の三つの要素を挙げ、ダンススコアや舞踏譜の内容の調査を行うことである。特にポスト・モダンダンスや舞踏が狙いとした実験プロジェクトの中での「偶然的要素」の介入に焦点を絞り、3つの要素がいかに作品化されたかを個々の作品分析を通じて明らかにする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

ポスト・モダンダンスにおけるダンススコアは、現代ダンスの分野だけではなく、実験音楽や現代美術の分野で以前から研究されてきたが、「振付方法」に着目した研究は多くない。ジュリー・サルモン(Julie Sermon)やイヴァン・シャピユイ(Yvane Chapuis)編の『スコア、舞台実践における物質とコンセプト (20世紀、21世紀) (Partition(s) – Objets et concept des pratiques scéniques(20<sup>e</sup> et 21<sup>e</sup> siècles)』(2016, Les presses du réel)では、総括的にダンススコアに言及されているものの、「遊戯性」、「即興」、「創作プロセス」といった諸要素は、別事象として指摘されている。ダンススコアあるいはドローイングを「偶然性を生み出す振付方法」と捉え、ポスト・モダンダンス研究において積みかさねられたルールやゲームといった制約と記述の問題を接続させて体系的に考察する必要がある。また、同時代の舞踏と比較考察しながら、ポスト・モダンダンスにおける偶然性との共通性及び差異について明らかにする。

本研究では、「ダンススコアやドローイングに依拠して偶然性が現れる」作品群の考察を通じて、ポスト・モダンダンスの振付方法の役割を明らかにするとともに、これらの振付方法がもたらす社会批判の射程を測ることである。また、同時代の日本の舞踏に関する振付方法についても同様に考察していく。偶然性は、振付家が意図した法則以外の法則に作用を受けることによって生じるが、これらの外部の法則が現れる事例を調査する。本研究が直接の対象とするダンススコアやドローイングはアンナ・ハルプリン(Anna Halprin)の『city dance』(1976-77)やイヴォンヌ・レイナー(Yvonne Rainer)の『Trio B: running』(1966-68)、スティーヴ・バクストン(Steve Paxton)の『Satisfying lover』(1967)である。以上の対象について、「偶然性」の概念を振付方法に即しながら、具体的な作品に基づいて作品分析を行うため、ポスト・モダンダンスを代表する振付家たちへの聞き取り調査を行い、上演の前に記録されるダンススコアやドローイングの機能について、包括的な解明を行う。

#### 【結論・考察】（４００字程度）

ポスト・モダンダンスの振付家たちはアマチュアの人々を巻き込み、芸術を生活の中に組み込んでいる。特に、アンナ・ハルプリンやイヴォンヌ・レイナー、スティーヴ・パクストンにみられる一般市民やアマチュアのダンサーが参加するような作品において、振付家はダンススコアあるいはドローイングを用い、「自発的な交渉」や「集団のダイナミックな表現」として、即興の要素を捉えている。したがって、「即興」及び「創作プロセス」は、アマチュアの介入によって「遊戯性」を助長させていることが考察できる。また、社会の中でダンスそれ自体を議論することによって、オープンエンドな作品が構築され、観客の介入や自然環境といった外部法則を振付方法に組み込んでいることが明らかとなった。加えて、舞踏譜における記述は身体運動の「プロトコル（原型）」としての機能を保持する一方で、ダンサーに対する制約は、言葉のもたらす偶発的な側面に依拠していることが明白となった。

助成番号

17-

## 研究成果公表報告

(電子メール)

記入日 年 月 日

フリガナ			
氏名			
所属機関及び職名			
所在地	〒	都道府県	(TEL) - -
自宅住所	〒	都道府県	(TEL) - -
E-mailアドレス			
助成決定時の所属大学院	(現在と異なる場合のみ記入下さい)		

## 研究題目

研究題目
------

発表年月	
公表の形態(論文、書籍等)及び題名、出版元等	
公表内容の要旨(200字程度)	

※ 成果公表の際には必ず当財団の助成を受けた旨、論文等に記載してください。